

自らの授業を研究対象とする

村川雅弘（鳴門教育大学助教授）



村川：後ろでですね、BGV（バック・グラウンド・ビデオ）といいますか、私が作った自分の授業を紹介するビデオを音声抜きで流しておりますので、私の話も聞きながら見ていただけたらいいと思います。私は、プリントをこのようにB4のものを4枚用意してきました。詳しくは後で読んでいただけたらと思います。どういう事をしているかということをお話したいなと思います。

私はですね、教育大の方にいまして、専門は、カリキュラム研究と授業研究と放送教育研究をやっております。大学教育は、そういう意味で研究対象じゃないんですが、こういうことをやりかけたきっかけというのはですね、私自身が授業研究をやって、やはり自分が大学で授業をするのに、いい授業が出来ないと、人前で「授業研究をやってます。」と言えない、ということがまず第1点だったことですね。それから、私が一番初めに大学で講義をした時に、試しにビデオを撮ってみたんですね、それを見返してみても、2点ほど問題点があるなど、自分でビデオを見ていろいろ感じたことがあったということです。それからもう1つ、やはりいろんな授業をしてる人のいい点を学び取りたいなというのがありまして、実は4年ほど前に、文部省の在研でアメリカのニュージャージーに行かせていただいた。ラトガース大学、今外国人の研究員として放送教育開発センターに来られてる島原宜男先生のところに行きました。それで教育学部で最もいい授業をする先生の授業を教えてくださいということで、それを聴講しました。そういう意味で、私なりにいろいろ興味を持ってやってきたわけですね。

特に授業改善というか、工夫改善をしたいなと思ったのがここにもちょっと書いてますが、山形大学から集中講義の依頼を受けた時です。その時の条件が学生数が約200名、教室が200人収容で、4日間で30時間の講義を行う。時期も秋休みの期間中であって、教科は生活科といたしまして、平成4年度の新教育課程から初めて出ました。小学校低学年の生活科というものを、学生は全く受けたことがないと、見たことがない。それをどう教えるのかということで、自分なりのチャレンジをしてみようと思ったわけです。

まず、200人収容という問題です。何が弱点かと、この講義形式で、200人対象で何が弱点かとまず考えてた。まず彼らは生活科というのを見たことがない、具体的なものを見たことがないのに、どのように生活科というものを伝えるかということです。私が研究途上でいろいろ現場と関わって残してきた映像資料、それは授業場面であったり、あるいは教師が開発した教材であったりします。まずそういうものを視聴覚機材をつかって提示しようと、まず具体的なものを見せないことには彼らには伝わらない、ということが第1点でした。

次に具体だけでは駄目ですので、概念なり、知識なりをどう教えるかということで、授業

内容の配列を具体から抽象へという、そういう配列にしました。例えば、生活科において、教材研究の重要性、あるいは生活科の中で教材を作るということはですね、どういう点を重視するかというのをまず文献とかテキストで説明するのではなくて、まずある教師が生活科の教材を考える時に、どういう教材を選んだか、その時の手順はどうだったか、どんなことに悩んだか、実際子供はどうだったか、そういうのを具体的な映像を見せながら、そしてまず彼らに考えさせると。あなたがもしも小学校1年の子供に、生き物との係わり、思いやりとか生命の尊さを子供達に感じとらせたい場合にどういう生き物を使うかということ、まず学生達に考えさせます。意見も言わせます。それじゃあこのAという教師はツバメを使ったんだと、なぜこの教師はツバメを使ったのかということで、具体的なその教師のツバメを使った実践を見せます。そしてその後でツバメをなぜ使ったかという、その教師の根拠を説明しまして、それとの関わりで、それでは生活科というのはどういう教科なのか。そういうような形で、いわゆる具体的なもの、視聴覚的のようなものを提示しながら、そして彼らに考えさせて、そしてその後で資料等で説明するという、そういう流れにしたわけですね。

今もちょっとお話ししましたが、その時に、彼らに授業中に、真面目に聞けとか、しっかり考えろと言っても、これは聞いた振りをしてなかなか上手くいかない。今言いましたように、4日間で、私は30回程度質問するわけです（図V-1）。

授業における質問項目とその意図（平成5年度・一部）	
〔質問項目〕	〔質問の意図〕
①自己紹介	学生との人間関係の円滑化、自己紹介の意味を考えさせる伏線
②生活科に対する理解・興味	全講義終了後の変容をみる、講義に対する学習の構え
③生活科に対するイメージ等	生活科誕生の経緯や目標についての興味づけ、学習の構え
④事例のT教諭はなぜツバメを教材として使ったか	生きもの選択のポイントや生活科における教材研究の重要性、地域素材の教材化の必要性を理解させるための伏線
⑫「お祭り」の金魚すくい屋の金魚をどんな材料で作るか	子どもの創造性の豊かさを理解させるための伏線、教材開発における教師の創意工夫の重要性を理解させるための伏線
⑬自分の名前の由来について	生活科2年「自分の成長」に関する単元でよく取り入れられる活動の意義と配慮事項などを理解させるための伏線、質問⑬に関連
⑳㉑子どもがカードに書いた疑問について解答を考える	子どもが日常生活や生活科実践を通して気づく疑問や創造性の豊かさや広がりについて理解させるための伏線、質問㉑に関連
㉒事例に対する感想	事例から生活科における教師の役割や実践上の問題点を理解させる

図V-1

あなたならどうするかと。この教師はこういう場面で、こういうように悩んだんだ、あなたならどうするか、というようなことで、その場で3分とか5分とか時間を与えて書かせます。これは私は問題解決的なことを、疑似体験的に具体的なものを提示して彼らに考えさせ、その上で今言いましたように、知識、理解というものを押さえていく。書かさないと考えません。考えると私の言うことがよく解りますから、そして興味も湧いてくると、理解も高ま

るということです。大体4日間の初日の午前中は、みんな「エーッ」とか言ってですねビックリして、「こんな授業初めてだ、書くのはしんどい」というのが、初日の午前中の反応ですが、午後辺りから、「書くことによって考える、考えることによって理解できる、理解できるから面白い」というふうに変わってきます。非常に効果を得ています。

またもう1つ考えたのは、この4日間でどういう知識や理解を押さえないか、ということも大事なんです。先程も、「教論と教授」というお話しがでましたけども、私はやはり知識、理解も押さなきゃいけないと考えます。彼らは採用試験もあるわけですから。しかし、今も言いましたように、生活科っていうのは本来ですね教科書を使わない教科ですから、結局自分で子供の実態を見て、地域の実態を見てですね、どういう教材を使っていくか、どういう学習展開をするかというのを、教師1人1人が

考えなきゃいけない教科なのです。そうすると知識、理解も大事ですけども、大事なのはそういう認識を持つということ、それから自分でやはり教材なり単元を開発していくんだ、そのために子供もしっかり理解していかないといけないという、そういう態度。それから実際に教材というのはどういう手順で開発していくのかと、実際のトライアウトはできないのですけども、映像を使って疑似体験してもらって、それをすることによってスキルのものを経験してもらおうと、そういうことを考えています。

それでちょっとこのプリントの説明をしとかなないといけないと思うのですが、2頁目の表1(図V-2)と書いてあるのがですね、これまで生活科をいろいろ授業研究やってきて、具体的に表した教師の力量項目のようなものを表しています。そして4頁に書いてあるのが、これが平成5年度の講義内容の流れです(図V-3)。

生活科実践に必要な教師の力量項目

- (1) 生活科の趣旨や目標・内容を十分に理解する
- (2) 子どもにとっての単元の意味を考える
- (3) 発想の転換をはかる
- (4) 生活科で育てる力を明確にする
- (5) 年間レベルで単元や活動を関連づける
- (6) ごっこ活動の中に現実性を盛り込む
- (7) 地域や子どもの実態にあった教材を開発する
- (8) 教科の枠で子どもを見ない
- (9) 校内外の人的・物的環境を整備する
- (10) 日常的な体験活動を促す
- (11) 子どもに明確な「めあて」を持たせる
- (12) 体験情報の交換を活性化する
- (13) 安全面に留意する
- (14) 子どもの体験や発想、個性を生かす
- (15) 子どもの実態を総合的に把握する
- (16) 他の教科への関連・発展を積極的にはかる
- (17) 単元開発に関する要因・要素を理解する
- (18) 実践を通して、単元を評価・改善する
- (19) 協同で実践に取り組む
- (20) 教師自身が多様で豊かな活動を体験する

図V-2

生活科（Y大学・93年度）・講義内容

日	次	内容 [メディア]	関連力量事項	質問・課題
9月28日	1	自己紹介 [VF] 生活科に対する理解・興味		①自己紹介 ②生活科に対する理解・興味
	2	誕生の経緯 [VTR/TXT] 自然体験度 [PRT]	(1)趣旨 (1)趣旨	③教科イメージと誕生理由 ④あなたの自然体験度 ⑤自然体験度山形版の作成
		生活科の目標と内容 [TXT]	(1)目標・内容	⑥教師をめざす理由、契機
	3	教師の願い・単元の意味 CS「ツバメ」 [VTR/PRT]	(7)教材研究(8)教科の粹	⑧あなたが選ぶ生きもの ⑨教材選択の理由
	4	CS「給食センター」 [VF]	(2)意味(6)現実性	⑩事例の問題点 ⑪初日の感想・評価・質問
9月29日	1	CS「お祭り」 [VF/PRT]	(2)意味(11)めあて(14)個性	⑫「金魚」の材料の工夫 ⑬⑫の材料を選んだ理由 ⑭図工と生活科の違い
	2	1年の年間計画 [VF/TXT] 2年の年間計画 [VF/TXT]	(1)生活科の内容(5)年間計画	⑮「握手大作戦」の工夫 ⑯通りの名前（理科室ほか） ⑰あなたの名前の由来 ⑱由来を調べる意義と問題 ⑲教材の持つ意味の違い
	3	日常的教材・環境 [VF/PRT] 学校ぐるみの実践 [PRT] CS「公園で遊ぼう」 [VF]	(10)日常化(9)環境整備 (6)現実性(9)環境(19)協同 (17)要因・要素(18)改善システム	⑳事例の持つ意味
	4	評価の方法 [PRT] TS「生活科と環境教育」	(15)子ども理解 (16)環境教育	㉑トーク・ショーについての感想 ㉒2日目の感想・評価・質問
9月30日	1	CS「遊び場」 [PRT/TP/VF]	(2)意味(4)(16)情報教育(10)日常化 (12)情報交換(16)理科・社会科 (3)発想(7)教材(9)環境(18)協同	㉓子どもの疑問に対する解答 ㉔子どもの疑問に対する解答 ㉕子どもの観察力について
	2	CS「アジサイ」 [PRT/VF] CS「おへそ」 [PRT] 「パイプ」 [VTR] CS「あかちゃん」 [VTR/PRT] TS「学校適応と生活科」	(3)発想(7)教材(9)環境(18)協同 (16)理科・性教育(13)安全 (16)性教育 (16)性教育 (1)趣旨(15)子ども理解	㉖ビデオに対する感想 ㉗トーク・ショーについての感想
	3	「生活科①」 [VTR]	(11)めあて(14)個性(19)協同(13)安全	㉘事例からの教師の手だて
	4	アメリカの教育 [VF/PRT]	(3)発想(14)個性	㉙アメリカの教育の感想 ㉚2日目の感想・評価・質問
10月1日	1	「もうひとつの教育」 [VTR] 「伊那小学校」 [VF]	(3)発想(1)趣旨	㉛感想
	2	「驚異の超感覚」ほか [VTR]	(20)体験	
	3	アンケート 課題レポートⅠ 課題レポートⅡ	特に(1)、(1)～(20)の復習・整理 特に(20)、(1)～(20)の復習・整理	○出欠自己申告○授業評価 ○生活科についての理解の妄容 ○追究課題の設定と具体的方法

図V-3

ここで1番左端の方には、どんな内容を押さえて、その時にどんなメディアを使うかということですが、私が最も使うメディアは、ビデオフロッピーというものです。今日は持ってきておりませんが、何と言いますか、小さい、そうですね正方形なんです、一辺が5cmぐらい、幅が5mmぐらいのフロッピーがあるのです。それにカラーの静止画像が50枚入ります。それを約20枚ということですから、1000画面の具体的な映像を提示しながら進めます。まあビデオも使うのですが、どちらかという静止画像で、この単元はどのような単元かと、どういう教材かというのを、私が言葉で説明しながら、そういう具体的な状況を彼らに伝える。そういうことで、最も使うのはビデオフロッピーで、毎年1000画面を持っていきます。ビデオテープは7本ぐらいです。プリント教材は20枚弱と。それからテキストは文部省の指導資料を使ってるのですが、4日間でテキストを使う時間数の合計は約10分ぐらいです。後はテキストを使わずにやります。4日間のうちですね。

それから()の関連力量事項ということで、私なりに想定した20個の力量を、どの題材で押さえるか。1つの題材で全てを押さえようというのは、非常に無理なところがありまして、やはりいろんな具体的な実践授業を集めていく中で、この事例はこういうのを学生に伝えるのには最も適しているというのが、やっぱり1つか2つなんですね。そういう意味で、そういう関連力量事項というのが変わってきます。それから質問、課題というのは、ここにも簡単に書いてありますが、「あなたならどうする、この教師はこうした、何故か」そういうような形で約30問を4日間で聞いていく。

最後に学生からの授業評価ということで、これは私達の研究グループの一員でもあります、三重大学の織田揮準先生の開発されたものを、私なりにちょっと組み替えて全部で33項目聞いております(図V-4)。

学生による授業評価 (三重大織田式9110一部変更)										
この調査は、「大学の授業をより魅力的なものに改善するにはどうすればよいか」について検討するために開発されたものです。授業が学生にどのように評価されているのか。また、どのように改善すれば魅力的な授業になるか等、学生側から見た授業改善に関する資料を収集するものです。ご協力下さい。										
評価者：Y大学 (1・2・3・4) 学年 (男・女)	[授業の評価]					授業の現状				
授業名：生活科 (村川 雅弘)	5	4	3	2	1	DK	に満足して			
評価日：1993年10月1日	は	や	中	や	い	該	いますか			
	い	や	間	や	い	当				
		は		い	え	せ	M	*	F	
		い		い		ず	満	中	不	
				え			足	間	満	
この授業、または、授業担当者(教師)は、										
1 ユーモアのある授業であった.....	5	4	3	2	1	DK	M	*	F	
2 教師の雑談(脱線)は、有益で楽しかった.....	5	4	3	2	1	DK	M	*	F	
33 自分の考えを書くことは大変だった.....	5	4	3	2	1	DK	M	*	F	
34 (トーク・ショーはよかった).....	5	4	3	2	1	DK	M	*	F	

図V-4

学生による授業評価結果（平成4年度・5年度「生活科」担当教官：村川雅弘）

授業評価の視点・評価項目		平成4年度		平成5年度	
		平均	SD	平均	SD
授業内容	16 授業内容は、構造化され体系立てられていた	4.16	0.92	3.97	0.86
	17 授業は、よく準備されていた	4.88	0.38	4.63	0.67
	18 担当教科について、十分な知識を提供した	4.60	0.73	4.48	0.72
	21 引用された事例は授業内容に即して興味深かった	4.70	0.59	4.67	0.58
学習活動	7 リポート作成、予習復習などの負担の大きな授業であった	1.96	1.23	1.66	0.97
	9 教師は教室での討論を積極的にすすめた	2.80	1.16	2.73	1.25
	8 学生が独自に思考することを奨励した	4.57	0.77	4.56	0.65
	32 自分の考えを書くことにより学習意欲や理解が高まった	4.36	0.85	4.36	0.78
	33 自分の考えを書くことは大変だった	4.06	1.27	3.57	1.25
	12 学生が参加する適度な作業が含まれていた	4.63	0.78	4.64	0.66
話術・説明	1 ユーモアのある授業であった	4.94	0.23	4.74	0.49
	2 教師の雑談（脱線）は、有益で楽しかった	4.81	0.51	4.59	0.68
	3 声やジェスチャーの使い方が効果的であった	4.39	0.80	4.18	0.95
	15 説明は明快で、理解し易かった	4.40	0.83	4.39	0.72
教材・メディア	4 授業は、よく聞き取れた	4.49	0.80	4.38	0.87
	5 板書が効果的であった	2.53	0.95	3.16	1.01
	6 OHPの使い方が効果的であった	3.91	1.62	4.66	0.63
	22 配布資料は授業内容を理解する上で役に立った	4.08	0.88	4.09	0.89
	23 テキストは授業内容に合っていた	3.75	1.08	3.67	1.03
	24 視聴覚資料は授業内容を具体的に知る上で有効だった	4.85	0.48	4.82	0.44
学生へのKR	10 教師は、学生の質問や意見などによく対応した	4.63	0.69	4.43	0.77
	11 教師は学生の問題意識や感情に理解があった	4.34	0.81	4.03	0.91
	13 学生から何かを得ようとする態度が教師にあった	4.46	0.76	4.07	0.84
	14 教師は学生の意見や要望を取り入れて授業改善に努めた	4.10	0.93	3.98	0.85
知的刺激・興味	25 教師の意見や行動に共感するものがあった	4.58	0.69	4.32	0.78
	26 今日の教育問題を考えるきっかけとなった	4.61	0.76	4.44	0.78
	27 授業は、知的な刺激を受けるよい経験となった	4.64	0.68	4.38	0.78
	28 自分の知識や常識を覆すインパクトがあった	4.28	0.94	3.91	1.06
	29 この授業から多くのものを学んだ	4.64	0.61	4.48	0.72
その他	19 情熱をもって授業をした	4.84	0.44	4.72	0.51
	20 授業を充実させようとする努力や工夫があった	4.89	0.33	4.85	0.42
	30 進んで出席したくなる授業だった	4.57	0.65	4.28	0.80
	31 この授業をとるように友人や後輩にすすめたい	4.80	0.56	4.65	0.62
	34 トークショーはよかった			4.12	0.94
評価者人数			192		158

図V-5

図V-5は結果なのですが、平成4年度、5年度、それから今年の6年度も取っておりますが、5年度までの結果です。これは5段階の評定尺度法です。ですから5点満点ですね。だから大体3点でどちらでもないのですが、嬉しいことに比較的高い数値が出ています。数値の低い、例えば7番、9番というのは、これ逆転項目じゃないですが、7番は負担が多かったと、そうではないということですね。あといろいろ問題点があります。板書はあまりしません。それからOHPというのは、平成4年度はほとんど使いませんでした。5年度は反省をしまして、使うようにしました。それからテキストが授業内容に合っていたかどうか、23番ですが、今も言いましたように、テキストはほとんど使っておりませんので、これも低い結果になっております。それから平成5年度のみ、最後の34番にありますように、山形大学の2人の教官と、それぞれ別の日に約30分のトークショーというのをやってみました。生活科について多領域の先生と議論してみる、こういうようなこともやっております。ちょっとだけ映像を流してもらえませんか。音を。

(ビデオ視聴)

語術・説明については全般的に高い評価を得ています。そして教材メディアについては大教室であるにも拘わらず、授業者の声がいきとどいているようです。

村川：今年度は、全30時間全部ビデオ撮りしまして、そのうち1部映像を使いまして14分の番組にしました。自分はこう考えてこんな授業をやって、学生からの評価はこうだった、というビデオを今年度一度作ってみました。それが今お流ししているものです。また昨年度から少し私なりにやって来ているのがですね、3番目に書いてありますが、現場の方でもTT(ティーム・ティーチング)というのが流行っております。私も、昨年度から山形大学では先程のトークショーのようなものを入れたり、私の大学では私の講座の教授とタッグマッチ方式ということで、2時間連続の授業の前半を私が、後半を教授が担当するというようなことで、タッグマッチ方式で、それぞれの個性を出したり、その他基礎ゼミや実地教育で、ティーム・ティーチングなどを、大学の方でやっております。その点については、今後まとめていきたいなと考えております。以上です。

司会者：どうもありがとうございました。確認のための質問だけをお受けしたいと思いますが。

立木：シオン短大の立木と申しますが、先生のお配りになったプリントの4頁の表の2のところですが、内容メディアという欄がありまして、そのところにVFというのが沢山あるんですが、これはビデオフロッピーのことですか。

村川：そうです。ビデオフロッピーです。

立木：そうしますと、カラー画像約1000枚というところのVFを見ますと、主として公園で遊ぼうとか遊び場とかですね、そういう野外での風景を写真に撮ったのが多いんですが、そ

ういう資料をカラー静止画像というふうに理解してよろしいでしょうか。

村川：いえ、ビデオフロッピーに入ってるのは、主にビデオと普通の写真から取ったものを全部入れ込んでます。

立木：あっ、ビデオから取ったものが1枚入ってて・・・。

村川：もう1枚入ってます。

立木：あと写真というのはどういう・・・。

村川：ですから私が、いろいろと・・・。

立木：風景。わりと・・・。

村川：子供が活動している写真だとか、教材だとか、環境だとかですね、生活科に関する諸々のものです。

立木：文字情報が多いということではないわけですね。

村川：ビデオフロッピーの中には、文字情報は一切ありません。

立木：どうもありがとうございました。

司会者：はい、どうぞ。

湯浅：先程の酪農大学の湯浅と申します。集中講義の後、試験とかそれから先生が学生に対して単位認定なさるとか、そういう授業内容以外のことはないのでしょうか。

村川：単位認定に関してはですね、最後に課題レポートというのを書かせます。なぜ書かせるかという、やはり知識、理解の押さえがテキストを使ってませんので、弱いということで、レポートをそうですね2000字を2つ書かせます。その時には、必ずテキストを読んで書いてくれということで、テキストを読まなければ書けないようなことを一応出します。それが60点ぐらいです。後の40点は、何て言いますか、毎回書いてもらった30問を全部集めておりますので、その書きっぷりで出席を兼ねて点数を付けております。だからそういう知識、理解がどれだけ定着したかという正確な数字を出すようなテストは、生活科の教科特性から合っていませんが、そういうテストもやらなきゃいけないかなとは考えております。

司会者：はい、ありがとうございます。それでは時間の関係で最後のご発題をお願いします。藤田先生お願いします。

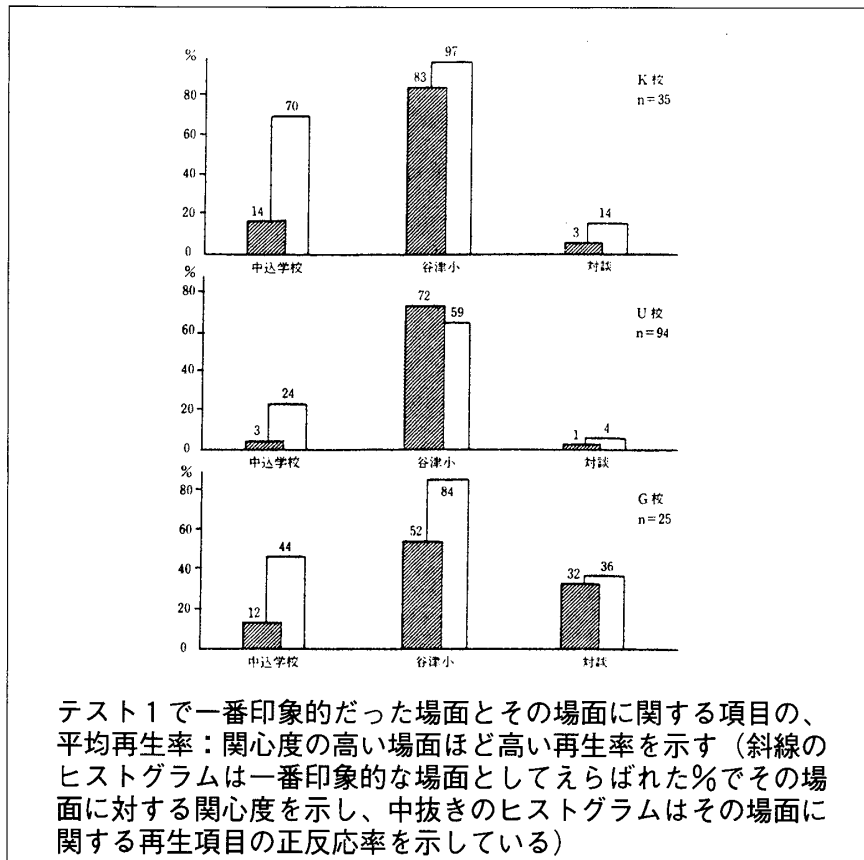
ビデオ教材における視聴覚情報提示と学習

藤田 恵壘（聖心女子大学教授）



藤田：聖心女子大学の藤田でございます。私は今年の3月までこのセンターで、映像教材の研究をやっておりましたから、今回はこのセンターで主に放送大学の番組分析などを中心として行ってまいりました映像学習の効果についてデータをお示して、皆様のご検討のご参考に供したいと思っております。

お渡ししてある資料にもありますように、視聴者の関心が高い映像というのは、視聴者がそこから多くの情報を受け取ることになるので、非常に再生されやすい傾向があります。後から視聴テストでも非常に高い再生率が得られます。ですから関心の高い番組ほど学習効果が高いことになります（図VI-1）。



図VI-1